

奇遇

芥川龍之介

青空文庫

編輯者 へんしゅうしゃ 支那シナへ旅行するそうですね。南ですか？ 北ですか？

小説家 南から北へ周めぐるつもりです。

編輯者 準備はもう出来たのですか？

小説家 大抵たいてい出来ました。ただ読む筈だった紀行や地誌などが、未だに読み切れないのに弱よわつています。

編輯者 (気がなさそうに) そんな本が何冊もあるのですか？

小説家 存外ありますよ。日本人が書いたのでは、七十八日遊記、支那文明記、支那漫遊

記、支那仏教遺物、支那風俗、支那人氣質、燕山えんざん楚水そすい、蘇浙そせつ小觀しょうかん、北清見聞録、

長江ちやうこう十年、觀光紀游、征塵錄せいじんろく、滿洲、巴蜀はしよく、湖南こなん、漢口かんこう、支那風韻記、支那――

編輯者 それをみんな読んだのですか？

小説家 何、まだ一冊も読まないのです。それから支那人が書いた本では、大清一統志たいしんいつとうし、

燕都遊覽志えんとゆうらんし、長安客話ちやうあんかくわ、帝京ていきやう――

編輯者 いや、もう本の名は沢山です。

小説家 まだ西洋人が書いた本は、一冊も云わなかったと思いますが、――

編輯者 西洋人の書いた支那の本なぞには、どうせ碌ろくな物はないでしょう。それより小説は出発まえ前に、きつと書いて貰えるでしょうね。

小説家 (急に悄しよげ気る) さあ、とにかくその前には、書き上げるつもりでいるのですが、

編輯者 一体何時いつ出発する予定ですか？

小説家 実は今日きょう出発する予定なのです。

編輯者 (驚いたように) 今日ですか？

小説家 ええ、五時の急行に乗る筈なのです。

編輯者 するともう出発前には、半時間しかないじゃありませんか？

小説家 まあそう云う勘かん定じようです。

編輯者 (腹を立てたように) では小説はどうなるのですか？

小説家 (いよいよ悄しよげ気る) 僕もどうなるかと思つて居るのです。

編輯者 どうもそう無責任では困りますなあ。しかし何しろ半時間ばかりでは、急に書いても貰えないでしょうし、……………

小説家　そうですね。ウエデキンドの芝居だと、この半時間ばかりの間あいだにも、不遇の音楽家が飛びこんで来たり、どこかの奥さんが自殺したり、いろいろな事件が起るのですが、——御待ちなさいよ。事によると机の抽斗ひきだしに、まだ何か発表しない原稿があるかも知れません。

編輯者　そうすると非常に好都合ですが——

小説家　（机の抽斗を探しながら）論文ではいけないでしょうね。

編輯者　何と云う論文ですか？

小説家　「文芸に及ぼすジャアナリズムの害毒」と云うのです。

編輯者　そんな論文はいけません。

小説家　これはどうですか？　まあ、体裁の上では小しょう品ひんですが、——

編輯者　「奇遇きぐう」と云う題ですね。どんな事を書いたのですか？

小説家　ちよいと読んで見ましようか？　二十分ばかりかかれば読めますから、——

×

×

×

至順年間の事である。長江に臨んだ古金陵の地に、王生と云う青年があつた。生れつき才力が豊な上に、容貌もまた美しい。何でも奇俊王家郎と称されたと言うから、その風采想うべしである。しかも年は二十になつたが、妻はまだ娶つていない。家は門地も正しいし、親譲りの資産も相当にある。詩酒の風流を恣にするには、こんな都合の好い身分はない。

實際また王生は、仲の好い友人の趙生と一しよに、自由な生活を送つていた。戯を聴きに行く事もある。博を打つて暮らす事もある。あるいはまた一晚中、秦淮あたりの酒家の卓子に、酒を飲み明かすことなぞもある。そう云う時には落着いた王生が、花磁盞を前にうつとりと、どこかの歌の聲に聞き入つていると、陽気な趙生は酢蟹を着に、金華酒の満を引きながら、盛んに妓品などを論じ立てるのである。

その王生がどう云う訳か、去年の秋以来忘れたように、ぼつたり痛飲を試みなくなつた。いや、痛飲ばかりではない。吃喝嫖賭の道楽にも、全然遠のいてしまったのである。趙生を始め大勢の友人たちは、勿論この変化を不思議に思つた。王生ももう道楽には、飽きたのかも知れないと云うものがある。いや、どこかに可愛い女が、出来たのだろうと云うものもある。が、肝腎の王生自身は、何度その訳を尋ねられても、ただ微笑を洩らす

ばかりで、何がどうしたとも返事をしない。

そんな事が一年ほど続いた後、ある日趙生が久しぶりに、王生の家を訪れると、彼は昨夜作つたと云つて、元稹体の会真詩三十韻を出して見せた。詩は花やかな対句の中に、絶えず嗟嘆の意が洩らしてある。恋をしている青年でもなければ、こう云う詩はたとい一行でも、書く事が出来ないに違いない。趙生は詩稿を王生に返すと、狡猾そうにちらりと相手を見ながら、

「君の鶯鶯はどこにいるのだ。」と云つた。

「僕の鶯鶯？ そんなものがあるものか。」

「嘘をつき給え。論より証拠はその指環じやないか。」

なるほど趙生が指さした几の上には、紫金碧甸の指環が一つ、読みさした本の上に転がっている。指環の主は勿論男ではない。が、王生はそれを取り上げると、ちよいと顔を暗くしたが、しかし存外平然と、徐ろにこんな話をし出した。

「僕の鶯鶯なぞと云うものはない。が、僕の恋をしている女はある。僕が去年の秋以来、君たちと太白を挙げなくなつたのは、確かにその女が出来たからだ。しかしその女と僕との関係は、君たちが想像しているような、ありふれた才子の情事ではない。こう云つた

ばかりでは何の事だか、勿論君にはのみこめないだろう。いや、のみこめないばかりなら
好いが、あるいは万事が嘘のような疑いを抱きたくなるかも知れない。それでは僕も本
意だから、この際君に一切の事情をすっかり打ち明けてしまおうと思う。退屈でもどうか
一通り、その女の話を書いてくれ給え。

「僕は君が知っている通り、松江に田を持つている。そうして毎年秋になると、一年
の年貢を取り立てるために、僕自身あそこへ下つて行く。所がちやうど去年の秋、やはり
松江へ下つた帰りに、舟が涇塘のほとりまで来ると、柳や槐に囲まれながら、酒旗を出し
た家が一軒見える。朱塗りの欄干が画いたように、折れ曲つている容子などでは、中々
大きな構えらしい。そのまた欄干の続いた外には、紅い芙蓉が何十株も、川の水に影を
落している。僕は喉が渴いていたから、早速その酒旗の出ている家へ、舟をつけると云い
つけたものだ。

「さてそこへ上つて見ると、案の定家も手広ければ、主の翁も卑しくない。その上酒は竹
葉青、肴は鱸に蟹と云うのだから、僕の満足は察してくれ給え。実際僕は久しぶりに、
旅愁も何も忘れながら、陶然と盃を口にしていた。その内にふと気がつく、誰か
一人幕の陰から、時々こちらを覗くものがある。が、僕はそちらを見るが早い、すぐに

幕まくらの後へ隠れてしまふ。そうして僕が眼を外らせば、じつとまたこちらを見つめてゐる。何だか翡翠ひすいの簪かんざしや金の耳環みみわが幕まくらの間に、ちらめくような気がするが、確かにそうかどうか判然はんぜんしない。現に一度なぞは玉のような顔が、ちらりとそこに見えたように思う。が、急にふり返ると、やはりただ幕ばかりが、懶ものうそうにだらりと下さつてゐる。そんな事を繰くり返かしている内に、僕はだんだん酒を飲むのが、妙まことにつまらなくなつて来たから、何枚かの錢ぜにを抛ほうり出すと、そうそう々々また舟へ歸つて来た。

「ところがその晩舟の中に、独りうとうとと眠つてゐると、僕は夢にもう一度、あの酒旗の出でてゐる家うちへ行つた。昼来た時には知らなかつたが、家うちには門かどが何なん重じゆうもある、その門を皆通り抜けた、一番奥おくまつた家の後あとに、小さな綉しゆう閣かくが一軒見える。その前には見事ぶじゆうな葡萄棚ぶどうだながあり、葡萄棚の下には石を畳たたんだ、一丈ばかりの泉水がある。僕はその池のほとりへ来た時、水の中の金魚が月の光に、はつきり数えられたのも覚えてゐる。池の左右さゆうに植うわつてゐるのは、二ふた株かぶとも垂すい糸し檜いに違ちがひない。それからまた牆しように寄よせては、翠すい柏はくの屏へいが結むすんである。その下にあるのは天工てんこうのように、石を積つんだ築つき山やまである。築山つきやまの草はことごとく金糸線きんしせん綉しゆう墩とんの属ぞくばかりだから、この頃のうそ寒さむにも凋しおれてゐない。窓まどの間には彫ちよう花かの籠かごに、緑色の鸚鵡おうむが飼かつてある。その鸚鵡おうむが僕を見ると、「今晚は」

と云つたのも忘れられない。軒の下には宙に吊つた、小さな木鶴の二双いが、煙の立つ線香を啣くわえている。窓の中を覗いて見ると、凡つくえの上の古銅瓶こどうへいに、孔雀くじやくの尾が何本も挿さしてある。その側にある筆硯類ひつけんるいは、いずれも清楚せいそと云うほかはない。と思うとまた人を待つように、碧玉しようの簫しょうなどもかかつている。壁には四幅しふくの金花箋きんかせんを貼つて、その上に詩が題してある。詩体はどうも蘇東坡そとうばの四時しじの詞しに倣ならつたものらしい。書は確かに趙ちようし松ようせつ雪せつを学んだと思う筆法である。その詩も一々覚えてはいるが、今は披露ひろうする必要もあるまい。それより君に聞いて貰もらいたいのは、そう云う月明りの部屋の中に、たった一人坐つていた、玉人ぎよくじんのような女の事だ。僕はその女を見た時ほど、女の美しさを感じた事はない。」

「有美ゆうび閨けい房ぼう秀しゆう 天人てんじん謫たく降かう来きたるかね。」

趙生ちようせいは微笑しながら、さつき王生おうせいが見せた会真詩かいしんしの冒頭の二句を口ずさんだ。

「まあ、そんなものだ。」

話したいと云つた癖に、王生はそう答えたぎり、いつまでも口を噤つぶんでいる。趙生はとうとう待兼ねたように、そつと王生の膝を突いた。

「それからどうしたのだ？」

「それから一しよに話をした。」

「話をしてから？」

「女が玉簫ぎやくしやうを吹いて聞かせた。曲は落梅風きやくらくばいふうだつたと思うが、——」

「それぎりかい？」

「それがすむとまた話をした。」

「それから？」

「それから急に眼がさめた。眼がさめて見るとさっきの通り、僕は舟の中に眠っている。艙そうの外は見渡す限り、茫茫とした月夜つきよの水ばかりだ。その時の寂しさは話した所が、天下にわかるものは一人もあるまい。」

「それ以来僕の心こころの中では、始終あの女の事を思っている。するとまた金きん陵りやうへ帰つてからも、不思議に毎晩眠りさえすれば、必ずあの家うちが夢に見える。しかも一昨日おとといの晩なぞは、僕が女に水すい晶しやうの双魚そうぎよの扇墜せんついを贈つたら、女は僕に紫金碧甸しこんへきでんの指環を抜いて渡してくれた。と思つて眼がさめると、扇墜が見えなくなつた代りに、いつか僕の枕もとには、この指環が一つ抜き捨ててある。してみれば女に遇あつてゐるのは、全然夢とばかりも思われない。が、夢でなければ何だと云うと、——僕も答を失してしまふ。」

「もし仮に夢だとすれば、僕は夢に見るよりほかに、あの家の娘を見たことはない。いや、娘がいるかどうか、それさえはつきりとは知らずにいる。が、たといその娘が、実際はこの世にいないのにしても、僕が彼女を思う心は、変る時があるとは考えられない。僕は僕の生きている限り、あの池だの葡萄棚だの緑色の鸚鵡だのと一しよに、やはり夢に見る娘の姿を懐しがらずにはいられないと思う。僕の話と云うのは、これだけなのだ。」

「なるほど、ありふれた才子の情事ではない。」

趙生は半ば憐むように、王生の顔へ眼をやった。

「それでは君はそれ以来、一度もその家へは行かないのかい。」

「うん。一度も行った事はない。が、もう十日ばかりすると、また松江へ下る事になっている。その時涓塘を通つたら、是非あの酒旗の出ている家へ、もう一度舟を寄せて見るつもりだ。」

それから実際十日ばかりすると、王生は例の通り舟を艤して、川下の松江へ下って行った。そうして彼が帰つて来た時には、——趙生を始め大勢の友人たちは、彼と一しよに舟を上つた少女の美しいのに驚かされた。少女は実際部屋の窓に、緑色の鸚鵡を飼いながら、これも去年の秋幕の陰から、そつと隙見をした王生の姿を、絶えず夢に見ていたそう

である。

「不思議な事もあればあるものだ。何しろ先方でもいつのまにか、水晶の双魚の扇墜が、枕もとにあつたと云うのだから、——」

趙生ひとごとはこう遇う人毎ひとごとに、王生の話ふいちようを吹聴ふいちようした。最後にその話が伝わったのは、錢せ塘んとつの文人瞿祐くゆうである。瞿祐はすぐにこの話から、美しい涓塘奇遇いとうきぐうき記を書いた。……

×

×

×

小説家 どうです、こんな調子では？

編輯者 ロマンティックな所いは好いいようです。とにかくその小しょう品ひんを貰もらう事にしまししよう。小説家 待つて下さい。まだ後あとが少し残のこっているのです。ええと、美しい涓塘奇遇いとうきぐうき記を書いた。——ここまでですすね。

×

×

×

しかし銭塘せんとうの瞿祐くゆうは勿論、趙生ちようせいなぞの友人たちも、王生おうせい夫婦を載せた舟が、涓塘けんたうの酒家しゆかを離れた時、彼が少女と交換した、下しものような会話を知らなかった。

「やつと芝居が無事にすんだね。おれはお前の阿父おとうさんに、每晚お前の夢を見ると云う、小説じみた嘘をつきながら、何度冷々ひやひやしたかわからないぜ。」

「私わたしもそれは心配でしたわ。あなたは金陵きんりやうの御友ごともたちにも、やつぱり嘘をおつきなすつたの。」

「ああ、やつぱり嘘をついたよ。始めは何とも云わなかったのだが、ふと友達にこの指環ゆびわを見つけられたものだから、やむを得ず阿父さんに話す筈の、夢の話をしてしまったのさ。」

「ではほんとうの事を知っているのは、一人もほかにはない訳ですわね。去年の秋あなたが私の部屋へ、忍んでいらした事を知っているのは、——」

「私。私。」

二人は声のした方へ、同時に驚いた眼をやった。そうしてすぐに笑い出した。帆檣ほぼしらに吊った彫花ちようかの籠には、緑色の鸚鵡おうむが賢そうに、王生と少女とを見下している。……

×

×

×

編輯者 それは蛇足だそくです。折角の読者の感興をぶち壊すようなものじやありませんか？

この小品が雑誌に載るのだったら、是非とも末段だけは削けずって貰います。

小説家 まだ最後ではないのです。もう少し後あとがあるので、まあ、我慢して聞いて下さい。

×

×

×

しかし錢塘の瞿祐は勿論、幸福に満ちた王生夫婦も、舟が涇塘を離れた時、少女の父母が交換した、下しものような会話を知らなかった。父母は二人とも目まかげをしながら、水際みずぎわの柳や槐えんじゆの陰に、その舟を見送っていたのである。

「お婆さん。」

「お爺さん。」

「まずまず無事に芝居もすむし、こんな目出たい事はないね。」

「ほんとうにこんな目出たい事には、もう二度とは遇あえませぬね。ただ私は娘むこや婿むこの、苦しそうな嘘を聞いているのが、それはそれは苦勞でしたよ。お爺さんは何も知らないように、黙もくつていろと御云いなすつたから、一生懸命にすましていましたが、今更いまさらあんな嘘をつかなくつても、すぐに一しよにはなれるでしように、——」

「まあ、そうやかましく云わずにやれ。娘も婿むこも極きまり悪わるさに、智慧ちえ袋ぶくろを絞しぼつてついた嘘だ。その上婿むこの身になれば、ああでも云わぬと、一人娘は、容易やすにくれまいと思おもつたかも知れぬ。お婆おばさん、お前はどうかと云うのだ。こんな目出たい婚こん礼れいに、泣ないてばかりいてはすまないじゃないか？」

「お爺さん。お前まへさんこそ泣ないている癖くせに……」

×

×

×

小説家　もう五六枚でおしまいです。次ついで手に残りも読んで見ましよう。

編輯者　いや、もうその先は沢山たくさんです。ちよいとその原稿を貸して下さい。あなたに黙もくつて置くと、だんだん作品が悪わるくなりそうです。今までも中途で切きつた方が、遥はるかに好すかった

と思いますが、——とにかくこの小^{しょう}品^{ひん}は貰いますから、そのつもりでいて下さい。

小説家　そこで切られては困るのですが、——

編輯者　おや、もうよほど急がないと、五時の急行には間^まに合いませんよ。原稿の事などはかまっていずに、早く自動車でも御呼びなさい。

小説家　そうですか。それは大変だ。ではさようなら。何^{なに}分^{ぶん}よろしく。

編輯者　さようなら、御機嫌好う。

(大正十年三月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奇遇

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>